

100年 先を読む

18

ギグワーカーが 日本の中小企業を 元気にする

一気に登場してきた ギグワーカー

最近「ギグワーカー」「ギグエコノミー」という言葉が話題になっている。日本では「臨時雇用仕事」「臨時雇用経済」と翻訳されるが、実例を紹介すれば理解しやすい。代表は「Uber」である。自家用車で乗客を輸送できる時間の余裕がある個人が会社に登録しておき、会社は輸送を希望する人々から到来した乗車地点、乗車時刻、目的地点などの情報を発信する。その要求に対応できる個人は自分が対応すると会社に連絡し、乗車地点へ出向き輸送するという仕組みである。

ギグはジャズなどを演奏するライブハウスで一回のみ演奏することを意味する業界用語であり、この言葉を単発の仕事に援用したのがギグワーカーである。これはアマゾンが荷物を同様の仕組みで配送する「アマゾンフレックス」、レストランに注文された食事をオフィスや自宅に配達する「Uberイーツ」など輸送分野で活発であるが、自宅をしばらく留守にするときに宿泊施設として提供する「エアビーアンドビー」などもギグワーカーの範疇である。

出遅れている日本でも登場しはじめている。カメラマンなどが登録しておき、式典や行事などの撮影依頼に対応する「ゼヒトモ」、経理処理の能力のある個人が登録しておき、依頼された経理事務を代行する「メリービズ」、ビジネスの相談に対応できる人材が登録する「ピザスク」など次第に増加している。アメリカでは現在、労働人口の4割

に相当する6000万人が登録していると推定されているが、日本の現状は全体の1割の700万人程度のものである。

ギグワーカーの背景と課題

このような従来とは相違する労働形態が急速に登場してきた第1の背景はインターネットとスマートフォンという情報技術が広範に普及したことである。それらが存在しなければ、細々とした需要に対応できる人材を即座に発見することはでき

ない。第2は情報技術を手中にしたミレニアル世代の労働意識が変化し、企業に雇用されて束縛されるよりは収入が多少減少しても自分の裁量で労働できる自由を選択する若者が増加してきたことである。

第3は先進諸国では平均寿命が延長し、これまでのように60歳前後で定年になれば、残余の30年近くの生活を維持する方法が必要となり、その手段の一種がギグワーカーになっていることである。日本では話題になった2000万円不足問題が後押しし、収入の不足を補充するための手段としてもギグワーカーは注目されている。第4は日本特有の課題であるが、人口減少による労働人口不足が憂慮され、その補填の手段としても期待されている。

一見、社会の変化に対応した適切な状況のようであるが、問題がないわけではない。最近、ニューヨークのマンハッタンではUberの利用者数がタクシーの利用者数を上回り、深刻な失業問題の原因となっている。日本でも経理事務を簡単に外注できれば企業の経理担当が整理されかねない。ギグワーカーは個人経営であるから、企業の社員のように医療保険や失業保険はなく、自分で

加入する必要がある、その手当てをしなければ事故や病気に遭遇したときに問題が発生する。

有望なギグワーカー中心の 企業組織

この急激な変化に企業が対処すべき方法を検討してみる。日本はアメリカに比較してギグワーカーの比率が少数であるが、これは労働意識の相違が影響している。欧米では旧約聖書にある楽園追放の挿話のように、労働は神様から処罰として強制された作業であり、理想は労働からの解放である。一方、日本では勤勉が正当とされ、会社への帰属が幸福を実感する手段である。実際、65歳以上でも仕事をしたいという比率は欧米では1桁であるが、日本では30%にもなっている。

これは人手不足に直面している中小企業にとって好機である。その不足をギグワーカーで代替する職場を実現すれば、2000万円不足問題も追風となって、人手不足の解消が可能になる。当然、熟練社員より能力が不足することは否定できないが、現在では人工知能もロボットもあり、その能力不足は十分に補完できる。さらに企業に拘束されることを敬遠する若者も増加しており、ギグワーカー中心の企業は十分に需要がある時代になりつつある。



東京大学名誉教授
つきおよしお
月尾嘉男
Tsukio Yoshio

昭和17(1942)年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究。全国各地でカヌーとクロスカントリースキーをしながら私塾を主宰し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。著書に『幸福実感社会への転進』（モロロジー研究所）、『転換日本』（東京大学出版会）ほか多数。